

2026 年 9 月 30 日 高の原教会 聖書講座および晩祷会 徳田 信

テーマ：見捨てない愛に支えられて

聖書：出エジプト記 32 章 7～14 節／マルコによる福音書 14 章 43～52 節

## 1，はじめに

もし誰かの失敗を知ったなら、私たちはどうするでしょうか。まず事情を聞きたいと思うこともあれば、もう関わりたくないと感じることもあるでしょう。その人のために祈ろうとしても、言葉が見つからないことがあります。人を思う気持ちと、傷ついた気持ちが、私たちの中でせめぎ合います。

今日の主題は「執り成し」です。他の人のために神に願い、その人を神の憐れみに委ねることです。出エジプト記では、神に背いた民のためにモーセが祈ります。マルコでは、主イエスが捕らえられ、弟子たちが逃げ去ります。今日は、人間の弱さがあるわになる場面を読みながら、私たちを支える神の恵みと、誰かのために祈ることの意味を考えていきたいと思います。

## 2，出エジプト記 32 章 待ちきれなかった民

イスラエルの民はエジプトから救い出され、シナイ山で神との契約を結びました。ところが、山に登ったモーセがなかなか戻って来ません。すると民は不安になり、自分たちを導く神々を造るようアロンに求めます。そこで造られたのが金の子牛でした（1～6 節）。救いを受けたはずの民が、早くも神の命じた道からそれてしまったのです。

アロンは、その金の子牛の前で主の祭りをを行うと宣言しています。これは何か別の宗教に乗り換えたということではないでしょう。しかし礼拝すべきお方を、自分たちが勝手に造った像に結びつけてしまった。見えない神を信頼し、待つことに耐えられず、目に見え、手元に置けるものに安心を求めたわけです。

私たちも、不安になると、目に見える成果や確かな答えを早く欲しくなるかもしれません。わかりやすい「祝福」（ご利益）など、形のあるものが私たちの信仰の助けになることも、あるかもしれません。しかし神は、私たちのちっぽけな願いよりも、さらに大きな恵みを与えようとしておられるかもしれません。彼らを遠くから批判するだけでなく、私たち自身の心の動きにも目を向けたいと思います。

問い 不安なとき、自分は何に確かさを求めるでしょうか。それが神への信頼を助けるときと、妨げるときには、どのような違いがあるでしょうか。

### 3，民のために神の前に立つモーセ

7～10 節で神は民の罪を告げます。そして彼らを滅ぼして、モーセから新たに大いなる民を起こすと語られます。モーセにとっては、問題を起こした人々を捨て置き、やり直す道が示されたとも読めます。しかし、モーセはその申し出に乗らず、今ここにいる民のために願うのです。

11～13 節の祈りで、モーセは、民の過ちを小さく見せようとはしません。訴えるのは、神がこの民を救い出されたこと、エジプトの人々がその出来事をどう受け止めるか、そしてアブラハム、イサク、イスラエルに与えられた約束です。モーセは、民が赦されるための根拠を、彼らの立派さに求めるのではなく、神がすでに結んでくださった契約に求めています。

7 節では神が、モーセの導き出した民という語り方をしています。それに対し 11 節では、モーセが神ご自身の民であると語り返しています。このやり取りには、民と神とのつながりが絶たれてしまうことを、何とかして食い止めようとする姿勢が見えます。ここから、執り成しとは、今その時の過ちだけで、その人の将来の可能性を閉じてしまわないよう願うことだ、と教えられます。

### 4，神が思い直されるということ

14 節では、神が民に下すと告げた災いを思い直された、と記されています。神も考えを変えられるのか、と戸惑うかもしれません。この物語は、神が人の祈りを聞き、その願いに応えてくださる方であることを、こうした人間同士のような生き生きとした対話で語っています（擬人法）。

ただし、うまく祈れば望んだ結果を引き出せる、ということを教えているわけではありません。モーセの祈りを支えているのは、神ご自身の約束です。また、この章の後半には、罪に対する厳しい裁きも続きます。14 節だけで、何もかもが元どおりになったと判断することはできません。赦しを願うことと、過ちの重さを受け止めること、その両方が大切にされています。

交読詩編の個所である 106 編も、民の罪を振り返り、23 節ではモーセが神の前に立って滅びを食い止めたことを歌います。その詩編は、先祖と共に自分たちも罪を犯したという告白から、この歴史を語っています（6 節）。過去の誰かの失敗をことさら数えるのではなく、自分も神の憐れみを必要とする一人として祈るのです。

問い モーセの祈りのどこが心に残るでしょうか。過ちを曖昧にせず、それでもその人のために祈るとは、どのようなことでしょうか。

## 5, マルコ 14 章 親しさのしるしが裏切りに

主イエスは、弟子たちと食事をした後、ゲツセマネで祈られました。死を前に恐れ、苦しみ、この杯を取りのけてくださるようお願いしつつ、父の御心にご自身を委ねられます。一方、弟子たちは眠り込んでしまいます（32～42 節）。今日の箇所は、その祈りの直後から始まります。

43 節でイスカリオテのユダが現れます。マルコはここでも、ユダが十二人の一人であることを記します。遠くからやってくる敵ではなく、寝食を共にして行動し、食卓を囲んだ仲間が武装した人々を連れて来るのです。ユダは接吻を、捕らえる相手を示す合図にしていました。親しさを表すはずの行為が、相手を引き渡すために用いられます。

ユダの動機については、さまざまな推測ができます。しかし聖書本文は詳しく説明していないので、ここで踏み込むことはしません。目を留めたいのは、信頼していた関係なのに、いやその関係を用いて、深く傷つけるという痛々しい出来事です。同信の仲間であることや、普段親しい言葉を交わしていることだけで、相手を大切にしているとは限りません。私たちの言葉と行いのつながりが問われます。

## 6, 剣が抜かれた場所で

47 節では、居合わせた弟子の一人が剣を抜き、大祭司の手下の耳を切り落とします。マルコは剣を抜いた人の名前を記していませんが、ヨハネ 18 章 10 節によるとペトロです。また、切られた人の耳を癒やす場面がルカ 22 章 51 節にあります。これら他の福音書の情報を踏まえつつも、まずマルコが何を描いているかを確かめましょう。

主イエスは、剣や棒を持って来た人々に、毎日神殿で教えていた自分をなぜその時には捕らえなかったのか、と問いかけます。はばかりことなく公に教えていたのに、今はまるで危険な犯罪者のような扱いです。主イエスは、なされていることのおかしさを言葉にしますが、力でこの場を切り抜ける道を取りません。

49 節では、聖書の言葉が実現することが語られます。ここでは特定の箇所は示されていませんが、直前の 27 節には、羊飼いが打たれ、羊が散るという聖書の言葉が引用されています。おぞましい暴力と見捨てられる経験の中でも、神の救いの歩みは途絶えることはない、、、その信頼の言葉として受け止めたいと思います。

問い 大切なものを守ろうとして、人を傷つける言葉や力に頼りたくなることはあるでしょうか。主イエスのなさり方から、何を考えさせられるでしょうか。

## 7、皆が逃げ去り 一人の若者も逃げる

50 節では、弟子たちが皆、主イエスを見捨てて逃げさります。少し前では、ペトロだけでなく皆が、「主を知らないとは決して言わない」と語っていたはずですが（31 節）。しかしその決意も、捕らえられる恐ろしさの前ではもろくも崩れます。彼ら弟子たちは、後に教会の指導者になりますが、彼らのかつての弱さがそのまま書き残されています。

51～52 節には、素肌に亜麻布をまとった若者が登場します。彼も捕らえられそうになると、布を残して裸で逃げます。誰であるかはわかりませんが、確かなのは、身を覆うものさえ捨てて一目散に逃げる姿です。主イエスの周りから人が去っていく、その様子をイメージさせます。

もちろん、危険な場所から離れることは不信仰だ、ということではありません。命や尊厳を守るため、距離を取ることも時に必要です。ここで私たちが気づかされるのは、「自分なら最後まで忠実でいられる」という思いの危うさです。弱さを知ること、同じように恐れている人を理解する入口になるでしょう。

## 8、逃げた弟子たちにも残される約束

今日のマルコの箇所には、主イエスが弟子たちのために執り成す祈りは記されていません。つながりは、この夜の前後を含む主イエスの歩みの中に見えてきます。

主イエスは、弟子たちがつまずくと予告したすぐ後に、復活して彼らより先にガリラヤへ行くと約束しておられます（14 章 27～28 節）。そして復活の朝、墓を訪れた女性たちは、その知らせを弟子たちとペトロに伝えるよう命じます（16 章 7 節）。逃げた人々にも、再び主イエスと出会う約束が届けられるのです。

さらに、主イエスはこの夜に先立つ食卓（最後の晩餐）で、ご自身の死を、多くの人のために命を差し出す出来事として語られました（14 章 22～24 節）。これらを合わせて読むと、弟子たちの失敗が、主イエスと彼らとの関わりの結末になっていないことが分かります。弱さに陥った弟子たちは、「見捨てない愛に支えられて」後に歩みなおすことになるのです。

## 9、主の食卓から 誰かのために祈る歩みへ

来主日 10 月 4 日は世界聖餐日・世界宣教の日です。主の食卓を囲むとき、私たちは、自分の教会だけでなく、さまざまな国や地域で同じ主を仰ぐ人々を覚えます。言葉も礼拝のかたちも異なり、置かれた状況も違います。それでも、主から受け取る恵みによって生かされる者として、互いの歩みに心を向けます。

主イエスからパンと杯を受け取った弟子たちは、恐れや弱さを抱えていました。聖餐を覚えることは、自分の信仰の強さを確かめる以上に、見捨てない主の愛に立ち返ることです。その恵みを受けた私たちが、誰かのために祈り、必要な支えを共に探していく。こうした「執り成し」が教会の歩みを支えます。

執り成しは、病気の人、家族のことで心を痛めている人、教会に来たくても来られない人、また、戦争や災害の中で日々を過ごす、まだ会ったことのない人、、、そのような人々の暮らしを思い浮かべることから始まります。祈っているうちに、話を聞くこと、連絡すること、支援を届けることなど、自分たちにできることが見えてくるかもしれません。

過ちを犯した人のために祈るときに、傷つけられた人の苦しみを忘れないことも大切です。見捨てないことは、何をしても構わないと認めることではありません。被害がこれ以上拡大せず、真実が明らかになり、責任を引き受けて歩み直せるよう願う。そのためには、適切な距離や慎重な判断、周囲の助けが必要な場合があります。

また、執り成す人が一人ですべてを背負う必要もありません。自分が疲れて祈れないときには、誰かに祈ってもらってよいのです。祈る人と祈られる人は、固定された立場ではありません。支える側になるときもあれば、支えられる側になるときもある。こうして互いに支えられながら、共に神の道を歩んでいきます。

モーセは、神が民に与えられた約束に訴えました。マルコの物語では、逃げ去る弟子たちにも、再び主に出会う約束が残されています。私たちも、その人の今の姿だけで「今後もこうに違いない」と決めつけず、神に委ねて祈りたいと思います。見捨てない愛に自分も支えられている。そのことを覚えるところから、誰かのために祈る歩みが始まります。

問い 今日、だれか覚えて祈りたい人や地域はあるでしょうか。その祈りと共に、自分たちにできる小さな支えはあるでしょうか。